Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-29

特集紹介 ライフコースからみる韓国の家族・ジェンダーの変容 : テグ調査コーホート分析を中心に（特集 東アジアにおける家族の伝統と現代 : 世代関係と子育てに着目して）

山根, 真理
洪, 上旭

(Citation)
社会学雑誌,34:1-20

(Issue Date)
2018-07-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011705

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011705

KOBE UNIVERSITY

特集紹介
――ライフコースからみる韓国の家族・ジェンダーの変容――
――テグ調査コーホート分析を中心に――

山根真理
愛知教育大学教育学部
洪上旭
嶺南大学校生活科学大学

一　はじめに

本稿の課題は、二〇〇九年に韓国のテグ広域市で実施した調査データを主資料にして、ライフコースと歴史過程の観点から、韓国の家族・ジェンダーの変容について考察することにある。個人の人生と歴史過程とのかかわりをみるライフコース研究は、一九七〇年代のアメリカで登場し、エルダー、ハレーブンなど代表的な著作を生み出してきた。（エルダー 一九八六、エルダー&ジール 二〇〇三、ハレーブン 二〇〇一）日本でもこの視角は一九八〇年代に定着し、日本の歴史過程と家族・人生に着目した研究蓄積を生み出してきた。（安藤 一九九八、二〇〇〇、正岡・藤見・島崎 一九九九、森岡・青井編、一九九一）

本稿では、アジア諸社会に視野を拡げ、ライフコースと歴史過程の重なりを考えるプロジェクトの一環として、韓国テグ広域市で二〇〇九年に実施したライフコースに関する質問紙調査データ[1]のコーホート別分析結果を主資料として、人生の出来事と歴史過程の関連を考え、そのことを通して韓国の家族・ジェンダーの変容について考える。考察にあたり、二〇〇四年にほぼ同世代の人々を対象にしてテグに隣接するキョンサン市で実施したインタビュー調査データを補足的に用いる。

本稿のライフコース研究としての意義は三点にある。一つは、本稿のもとになる研究は、アジアにおける比較視点をもってライフコースを捉えていることである。ライフコースの研究には欧米―日本の比較視点を持つ研究はある（例えば森岡・青井編 一九九一）が、植民地期の経験も含め、アジア諸地域における比較視点をもったライフコース研究は管見の限り見られず、その点での独自性がある。第二に、韓国のライフコース研究としての、一定の意義である。韓国において、ライフコース視点にたった研究は特に二〇〇〇年代以降、重要な実証研究がなされている。出産、労働過程など、特定のライフ・イベントに焦点をあてた計量的研究（朴他 二〇〇七、パク 二〇〇七）や、生活史の聞き取りデータを用いた意味論的考察（パク 二〇〇二、ソン 二〇一〇）など、歴史過程の中のライフ・イベントの変化やその意味にかかわる研究がなされている。しかし、ライフコース視角にたった研究は厚い層をなしているとはいえず（ソン 二〇一〇）、その意味で、本研究は韓国のライフコース研究に対しても一定の貢献をなしうると考えられる。第三に、ジェンダー視点をもち、ライフコースとケアを結びつける視点をもつことである。ライフコース研究で用いられる「人生の出来事」（ライフ・イベント）に加え、出産、育児、介護など、ケアにかかわる人間関係網に関する内容を入れ、両者を関連づけて考えることを目指した。

本稿では、出生、自分が育った時のケア・ネットワーク、教育と離家、子どもの出生とケア・ネットワーク、財産相続と継承に関する項目のコーホート分析結果を記述的に示し、歴史過程が人生に与えた影響について考察する。

二　調査概要と世代の設定

二―一　二〇〇九年テグ調査の概要

（一）調査方法

本稿のもとになるデータは、二〇〇九年三―四月に大韓民国テグ広域市で実施した質問紙調査である。対象者は、一九二〇～四〇年代生まれの高齢者（調査時点で六五歳以上）と設定した。テグ調査の対象者の選定にあたって、一九六三年に設立された社会団体を通して、テグ市に居住し年齢条件にあう人々に依頼した。五地域それぞれ一〇〇ケースを目標とし、テグ調査では九七票の回答を得た。調査実施にあたり調査員が面接して質問し、質問紙に記入する方法をとった[2]。

質問項目は森岡・青井、安藤（森岡・青井 一九九一、安藤 一九九八、二〇〇〇）を参考に、出生から調査時までのライフ・イベントに沿って構成し、それにケア（産育、介護）にかかわる人間関係網に関する項目を加える形で構成した。

（二）対象者の属性

表1にテグ調査対象者の属性を示す。九七人のうち、女性が五三人、男性が四四人である。出生年は一九二〇年代生まれの人が二七人、一九三〇年代生まれが四五人、一九四〇年代生まれが二五人、回答者全てが一九四四年以前、すなわち「日帝時代」からの「解放」以前に生まれている。調査時点における世帯形態は「夫婦のみ」（四八・五％）が最も多く、「子供夫婦と同居」している人は一七・五％である。出生地は慶尚北道（七五・三％）とテグ（九・三％）が大半を占める。「北韓」（北朝鮮）生まれの人が一人、「外国」生まれの人が七人いる。「外国」生まれの人は全て「日本」生まれである。

教育歴は性別による違いがみられる。男性は中等教育（高等学校）以上の教育歴の人が三八人（八六・四％）であるが、女性は中等教育以上の教育歴の人は二一人（三九・六％）であり、初等教育を受けた人が一四人（二六・四％）、「学校に行っていない」人が一〇人（一八・九％）である。同世代の経験から考えると教育歴が長く、この点は調査回答者の特徴である。父親の最長職は「農林漁業」が五八・八％と過半を占め、専門職が一二・四％とそれに続く。本人の初職は、男性は専門（四三・二％）、事務職（二〇・五％）が多い。女性は初職を回答した人の中では専門（一八・九％）、販売（一五・一％）が比較的多くを占めるが、無職（一七・〇％）に加えて「不明・無回答」（二〇・八％）も多い。「女性のライフコース」は、回答者の母親については「仕事経験なし」（五一・五％）と「継続就労」（三六・一％）に二分される。本人世代のライフコースも「仕事経験なし」と「継続就労」に二分される構図は共通しているが、本人のライフコースについては「結婚後中断」（一三・二％）「育児後就労」（一八・九％）が母世代より多い傾向がみられた。

総じて慶尚北道およびテグ市で生まれ、学歴、職業階層（特に男性）が高い人々が多くを占めることが、本調査対象者の特徴である。

表1　テグ調査対象者の属性

（n=97）（%）

							男性（n=44）	女性（n=53）
性別	男性	45.4	教育歴	教育を受けていない			2.3	18.9
	女性	54.6		書堂			0.0	0.0
	不明・無回答	0.0		初等学校			11.4	26.4
	計	100.0		中学校			0.0	11.3
出生年	1920 − 25	10.3		高等学校			36.4	34.0
	1925 − 29	17.5		専門大学			2.3	0.0
	1930 − 34	17.5		大学			36.4	5.7
	1935 − 39	28.9		大学院以上			11.4	0.0
	1940 − 44	25.8		その他			0.0	3.8
	不明・無回答	0.0		不明・無回答			0.0	0.0
	計	100.0		計			100.0	100.0
現在の世帯形態[1]	一人暮らし	18.6	職業				男性（n=44）	女性（n=53）
	夫婦のみ	48.5						
	子供夫婦と同居[2]	17.5	父最長職	専門	12.4	本人初職	43.2	18.9
	独身の子と同居	13.4		技術	1.0		9.1	7.5
	その他	2.1		管理	7.2		6.8	0.0
	計	100.0		事務	6.2		20.5	0.0
出生地	ソウル	0.0		販売	4.1		2.3	15.1
	プサン	1.0		サービス	1.0		0.0	1.9
	テグ	9.3		保安	0.0		0.0	0.0
	インチョン	0.0		農林漁業	58.8		2.3	7.5
	クァンジュ	0.0		生産・労務	3.1		4.5	7.5
	テジョン	0.0		軍人	0.0		0.0	0.0
	ウルサン	0.0		その他	5.2		9.1	3.8
	京機道	1.0		無職	1.0		0.0	17.0
	江原道	0.0		不明・無回答	0.0		2.3	20.8
	忠清北道	4.1		計	100.0		100.0	100.0
	忠清南道	0.0	女性のライフコース			本人・妻	本人（n=53）	妻（n=44）
	全羅北道	0.0						
	全羅南道	0.0	母	継続就労	36.1		17.0	29.5
	慶尚北道	75.3		中断再就労	0.0		0.0	0.0
	慶尚南道	1.0		結婚後中断	3.1		13.2	4.5
	済州道	0.0		育児後就労	6.2		18.9	6.8
	北韓	1.0		仕事経験なし	51.5		35.8	54.5
	外国	7.2		その他	3.1		7.5	4.5
	不明・無回答	0.0		不明・無回答	0.0		7.5	0.0
	計	100.0		計	100.0		100.0	100.0

1）「現在一緒に暮らしている人」を列挙した回答から再構成した。
2）子どもがおらず嫁、婿と同居のケースも含む。

二―二　二〇〇四年キョンサン調査の概要

（一）調査方法

本稿でテグデータを解釈するにあたり、二〇〇四年にテグ広域市東部に隣接する慶尚北道キョンサン市で実施したインタビュー調査[3]データを補足的に用いる。

キョンサン調査は二〇〇四年八～九月に実施した。対象者の選定にあたり、キョンサン市に位置する私立A大学の老人大学卒業生を対象に、同市に居住する一九二五～二九年出生コーホートの男女、一九三五～三九年出生コーホートの男女各一〇名、系四〇名を抽出し、調査依頼をした。依頼した対象者のなかで協力をえられなかったケースもあり、スノウボール方式で対象者を拡大してケースを追加したため、当初設定しなかった一九三〇～三四年生出生コーホートの人（六ケース）、テグ広域市居住の人（二ケース）も対象者に含まれる。最終的なインタビュー対象者は一九二五～三九年生まれの女性一六名、男性一四名である。

調査方法は半構造化インタビューである。質問項目の構成はのテグ質問紙調査と同様、ライフ・イベントに関する項目にケアにかかわる人間関係網に関する項目を加えて構成した。

（二）対象者の属性

二〇〇四年キョンサン調査の対象者は、女性一六人、男性一四人、出生年は一九二五～二九年生まれ九人、一九三〇～三四年生まれ六人、一九三五年～三九年生まれ一五人である。世帯形態は高齢者のみ世帯が三分の二を占めている（「単身」七人、「夫婦」九人、「既婚の子と同居」八人、「未婚の子と同居」二人、「親と同居」四人）。「産まれ育った土地」はキョンサンが一八人、それ以外の人も日本で生まれ育った三人を除けばテグまたは慶尚北道内の地域をあげている。

教育歴と職業経歴には性別による違いがみられる。教育歴（中退含む）は、女性は「公教育歴なし」三人、「初等学校」九人、「高校」二人、不明二人、男性は「公教育歴なし」一人、初等学校一人、中学二人、高校七人、大学二人、不明一人である。最長職は、女性は農業一一人、食堂経営二人、学校職員一人、不明一人、無職一人、男性は農業四人、公務員七人（うち農業兼三）、教員一人、「会社勤務」一人（農業兼）、「タクシー運転手など」一人である。

日本生まれの人を除けば慶尚北道あるいはテグ出身で大きな地理的移動をせずに慶尚北道地域にとどまった人が多数を占める点、特に男性において学歴、職業階層が相対的に高い点がテグ調査の対象者と共通するが、キョンサン調査の対象者は農業を生業（の一部）として維持してきた人が多い点がテグ調査対象者との違いであり、解釈にあたってその点に留意する必要がある。

二―三　調査地域

テグは朝鮮半島の東南部、慶尚北道の中央部に位置する、政府直轄の広域市である。新羅時代から地方の行政・軍事の要地であったが、朝鮮時代以降は慶尚北道の中心となり、農産物の集散地として商業が栄えてきた。「日帝時代」であった一九三〇年代から綿や毛織物などの繊維工業が発達した。

近年は、嶺南圏の産業団地との連携努力を通し、既存の繊維、一般機械、自動車部品中心の産業構造から、未来型自動車、先端機械、次世代電子・通信、再生可能エネルギーの関連企業を誘致し、新たな地域産業圏の形成が進められている。二〇一六年の人口は二四六万一〇〇二人、調査時に近い二〇一〇年の人口は二四四万六四一八人[4]であり、いずれもソウル、プサン、インチョンに次ぐ人口規模第四位の都市である。社会関係については、テグ広域市およびテグが位置する慶尚北道地方は韓国の中でも両班的伝統が強く、家族・親族関係や社会関係全般に関して「保守的」な傾向が強いとされてきた。

表2にテグ広域市および慶尚北道の人口、家族に関する指標を二〇一六年と調査時に近い二〇一〇年について示す。

表2　テグ広域市および慶尚北道の人口・家族指標（2010 年、2016 年）

	2010				2016			
	全国	ソウル	テグ	慶尚北道	全国	ソウル	テグ	慶尚北道
粗婚姻率	6.5	6.9	5.4	5.8	5.5	5.9	5.0	5.0
粗離婚率	2.3	2.1	2.1	2.1	2.1	1.8	1.8	2.0
合計特殊出生率	1.23	1.02	1.11	1.38	1.17	0.94	1.19	1.40
出生性比	1.07	1.07	1.09	1.07	1.05	1.05	1.04	1.07
高齢者率	10.9	9.7	10.0	15.6	13.5	13.1	13.2	18.2
平均世帯員数	2.7	2.7	2.7	2.4	2.5	2.5	2.5	2.3

出典：韓国統計庁「KOSIS」に掲載の各データより作成（URL:　http://kosis.kr/index/index.do　2018 年 6 月取得）
平均世帯員数、高齢者率は人口総調査、粗婚姻・婚姻率、合計特殊出生率、出生性比は人口動向調査に基づく。

これらの人口・家族指標について、テグ広域市に特徴的な傾向はみられず、総じて全国値に近い値を示している。一九九〇年代から顕著になった家族の現代的変容を反映して、ヨーロッパ諸国並みの婚姻率、世界的にみても高い部類に入る離婚率、超低出生率などの傾向が、テグ市にも見られる。市部以外の邑・面部を含む慶尚北道では、他の道と並んで合計特殊出生率がやや高く、高齢者比率も高めである。一九九〇年の時点ではテグおよび慶尚北道の出生性比は全国（一・一六）、ソウル（一・一三）よりもやや高く（テグ一・三〇、慶尚北道一・三一）、男児選好傾向が伺えたが、二〇一〇年代にはテグ、慶尚北道においても出生性比における男児選好傾向は沈静している。

二―四　出生コーホートの設定

調査対象となった一九二〇～四〇年代生まれの人々の出生コーホート設定にあたって、本稿では一九二〇年代生まれ（C二〇）、一九三〇年代生まれ（C三〇）、一九四〇年代生まれ（C四〇）と、西暦の一〇年での機械的な区分を用いている。ライフコース研究のコーホート設定として、コーホート経験を明瞭に理解するために出生年の間隔を空けて調査設計する手法がとられることが多く、本研究においてもその方法を検討したが、各地域それぞれで諸機関に協力を頼んで調査を実施した関係から、対象者の出生コーホートを厳密に指定することは難しく、「一九二〇～四〇年代生まれで六五歳以上の人」を対象者として設定した。

C二〇（一九二〇～二九年生まれ）は、アジア太平洋戦争突入時（一九四一）に二一～二一歳、日本敗戦による「解放」時（一九四五）に一六～二五歳、大韓民国成立時に一九～二八歳、朝鮮戦争終結時に二四～三三歳、朴正熙政権下の第一次経済計画開始年（一九六二）に三三～四二歳である。C三〇（一九三〇～三九年生まれ）は、アジア太平洋戦争突入時に二～一一歳、「解放」時に六～一五歳、大韓民国成立時に九～一八歳、朝鮮戦争終結時に一四～二三歳、第一次経済計画開始年に二三～三二歳である。C四〇（一九四〇～四五年生まれ）は、「解放」時に〇～四歳、大韓民国成立時に四～八歳、朝鮮戦争終結時に九～一三歳、第一次経済計画開始年に一八～二二歳である。

三　出生と成長

三―一　生まれ、育つ

それでは、人生の出来事に沿って、世代ごとの経験に注目してデータを読み取っていこう。表3に生まれた場所、表4に出生時に取りあげた人を示した。生まれた場所は「父母の家」が五九・八％と多く、「父方祖父母宅」が一八・六％、「母方祖父母宅」が一六・五％と拮抗している。世

代的には、「母方祖父母宅」が、出生年の遅い世代で多くなる傾向がみられる。「取りあげた人」は「父方祖母」が全体では四五・四％と中心を占める。出産の医療化以前の介助者が親族中心で、子どもにとって父方祖母、出産する女性にとっては姑が中心的役割を果たしているが、「母方祖母」も一定の割合（一八・六％）を示しており、出生年が遅い世代においてその割合は高い傾向にある。医療専門家をあげた人は、産婆五・二％、医者三・一％と、少ない。（表4）

表3　生まれた場所

(%)

	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
父方祖父母宅	22.2	17.8	16.0	18.6
母方祖父母宅	3.7	17.8	28.0	16.5
父母の家	74.1	55.6	52.0	59.8
助産所	0.0	0.0	0.0	0.0
病院	0.0	4.4	0.0	3.1
その他	0.0	2.2	0.0	1.0
知らない	0.0	2.2	0.0	1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0

表4　出生時に取りあげた人

(%)

	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
父方祖母	59.3	40.0	40.0	45.4
母方祖母	7.4	20.0	28.0	18.6
父	3.7	0.0	8.0	3.1
産婆	0.0	6.7	8.0	5.2
医者	0.0	4.4	4.0	3.1
その他	11.1	8.9	8.0	9.3
知らない	18.5	20.0	4.0	15.5
計	100.0	100.0	100.0	100.0

出生順位は、第一子三〇・九％、第二子一八・六％、第三子一八・六％、第四子九・三％、第五子一二・四％、第六子六・二％、第七子二・一％、第八子一・〇％である。きょうだい数の平均値は全体で五・三五（C二〇 四・七八、C三〇 五・四七、C四〇 五・七六）で、多産世代の人口的特徴があらわれている。

「幼い時、世話をしてくれた人」は、母親中心（「一番」八〇.四％、「その他」一七・五％）、それに父親（「一番」四・一％、「その他」四七・四％）、父方祖母（「一番」九・三％、「その他」二一・六％）、子供のきょうだい（「一番」一・〇％、「その他」一八・六％）が加わる構図である。この、育った時の世話ネットワークについて、世代的な傾向は特にみられない。（表5）

表5　幼いとき、世話をしてくれた人

(n=97)（%）

	一番世話してくれた人	その他に世話してくれた人（複数回答）
父親	4.1	47.4
母親	80.4	17.5
父方の祖父	1.0	9.3
父方の祖母	9.3	21.6
母方の祖父	1.0	0.0
母方の祖母	2.1	3.1
きょうだい	1.0	18.6
その他の親族	1.0	4.1
使用人	0.0	2.1
それ以外の人	0.0	4.1
不明・無回答	0.0	7.2
計	100.0	

「幼い時期に親と離れて暮らした」経験を持つ人は五人、養子に行った経験をもつ人は一人である。これらの経験をもつケースは少なく、世代的な考察をすることは難しい。

三―二　大人になる道筋

大人になる道筋に関して、教育歴（中退含む）と離家経験のデータを示す。属性に示したように、教育歴には性別による違いがみられる。女性については世代による違いがみられ、C二〇の女性では一七人中「教育を受けていない」人が七人、初等学校に通った経験のある人が七人と、初等教育以下の教育経験の人が大半を占める。「教育を受けていない」人はC三〇では三人、C四〇にはみられない。（表6）

離家経験（進学・就職・入隊・結婚等によって親もとを離れたこと）を「あり」とした人は九〇人（九二・八％）、「なし」は五人（五・二％）、「経験前に親が死亡した」人が二人（二・一％）である。離家の理由には性と世代による違いがみられる。性による違いは明瞭である。女性の離家理由は「結婚」が四一人（八二・〇％）と大半を占めるが、男性は「入隊」（一四人、三五・〇％）、「進学」（一一人、二七・五％）、「就職」（一〇人、二五・〇％）が拮抗している。男女それぞれについて世代に注目すると、女性については「進学」「就職」による離家経験はC三〇以降の世代に現れること、男性については「入隊」による離家経験はC二〇にはみられず、C三〇、C四〇では代表的な離家理由になる点に注目される。（表7）

表6　教育歴（女性）

（人数）

	C20	C30	C40	計
教育を受けていない	7	3	0	10
書堂	0	0	0	0
初等学校	7	6	1	14
中学校	1	2	3	6
高等学校	1	12	5	18
専門大学	0	1	2	3
大学	1	1	0	2
計	17	25	11	53

表7　離家の理由

（人数）

男性	C20	C30	C40	計
進学	2	5	4	11
就職	4	4	2	10
入隊	0	8	6	14
結婚	2	1	1	4
その他	0	0	1	1
計	8	18	14	40
女性	C20	C30	C40	計
進学	0	1	2	3
就職	0	3	1	4
入隊	0	0	0	0
結婚	15	19	7	41
その他	1	0	1	2
計	16	23	11	50

四　結婚

四―一　初婚の過程

結婚という人生の出来事にも、世代的な相違あるいは傾向がみられる。「初婚」経験について世代的な傾向としてまず指摘できるのは、男女ともに初婚年齢が連続的に上昇していることである。平均初婚年齢は、女性はC二〇一八・五、C三〇 二三・一、C四〇 二三・五、男性はC二〇二四・〇、C三〇 二六・一、C四〇 二八・〇である。九七ケースのうち夫年上婚が九二ケースと大半を占める。

結婚の経緯を「仲媒か恋愛か」という側面でみたとき、「仲媒結婚」八七・六％、「恋愛結婚」六・二％、「仲媒・恋愛半々」五・二％、「どちらでもない」一・〇％と、初婚の大半が「仲媒結婚」であり、世代による傾向はみられない。初婚配偶者との結婚の経緯、結婚前に出会った回数については、世代による経験の相違がみられる。C二〇では「親が決めた」「親から紹介」あわせて三三・三％と親の強い影響下にある結婚をした人が中心であるが、C三〇以降は「親族に紹介」（C三〇 三一・一％、C四〇 五二・〇％）が中心を占めている。親族以外では「近所の人に紹介」の世代を追った減少と「友人に紹介された」ケースのC三〇以降での出現がみてとれる。（表8）「結婚前に会った回数」は、世代による違いが明瞭にみられる。C二〇では「会ったことがない」が六三・〇％と主流であるがC三〇では一度なりとも会った人が七割弱となり、C四〇では「それ（三回）以上会った」人が六八・〇％と主流を占めるようになる。（表9）

表8　結婚の経緯

(%)

	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
親が決めた	18.5	13.3	8.0	13.4
親から紹介された	14.8	2.2	4.0	6.2
親族に紹介された	25.9	31.1	52.0	35.1
友人に紹介された	0.0	17.8	12.0	11.3
近所の人に紹介された	22.2	15.6	8.0	15.5
親の友達に紹介された	0.0	2.2	0.0	1.0
それ以外の人に紹介された	3.7	2.2	8.0	4.1
もともと知っていた	7.4	4.4	8.0	6.2
その他	7.4	11.1	0.0	7.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0

表9　結婚前に会った回数

(%)

	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
会ったことがない	63.0	31.1	4.0	33.0
1回会った	18.5	17.8	4.0	14.4
2、3回会った	7.4	22.2	24.0	18.6
それ以上会った	11.1	28.9	68.0	34.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0

四―二　配偶者との別居

「現在の配偶者と一年以上別居した経験」についても、世代的な傾向がみられる。配偶者と別居した経験が「ある」と回答した人は四四人（四五・四％）である。コーホート別にみるとC二〇は一五人（五五・六％）、C三〇は二一人（四六・七％）、C四〇は八人（三二・〇％）と、先行コーホートにおいて、夫婦別居経験をもつ人が多い傾向がみられる。別居経験を具体的に記述した回答にも、世代による別居経験の傾向がみてとれる。C二〇で別居経験をもつ一五人のうち四人は「日本」に言及（「日本徴用 満州」の記載含む）、五人が夫の軍隊・徴用経験に言及している。C三〇の二一人のうち「日本」に言及した人は一人、軍隊に言及した人は八人である。C四〇の八人のうち「仕事」に関する記述が四人、軍隊に関する記述があったのは一人である。6・25（ユギオ、朝鮮戦争のこと）に関しては二人（二六年生まれ女性、三〇年生まれ女性）が言及していた。植民地時代から朝鮮戦争の時期に初婚時期が重なる世代において、歴史過程が結婚生活の不安定さをもたらしている。

五　出産と子育て

五―一　出産

子どもの出産にも、コーホート経験としての特徴が色濃くあらわれる。子ども数の平均値は全体で三・五六、C二〇は四・二三、C三〇は三・四二、C四〇は二・九六である。対象者の人々の子どもが産まれた時期は朴正熙政権下の少産化政策（一九六〇～七〇年代）の時期に重なっており、その影響は後続コーホートにより強くあらわれている。

表10に出産場所、表11に「取り上げた人」（いずれも長子、末子）を示した。対象者の人々の子どもが生まれた時期は出産の医療化の時期とも重なっており、家から病院へと出産場所が移行している。家での出産の中では、長子、末子とも「自分の家」が最も多く、全体の約五割を占めている。「夫方家」はC二〇の長子出生の時には一八・五％、C三〇でも一五・六％は存在したが、C四〇では八・〇％である。「妻方家」での出産は長子出生時にはC三〇以降世代でやや多くなる傾向がみられる。末子出生時には家での出産は「自分の家」に集中し、夫方、妻方いずれかの親の家での出産はほとんどみられない。

子どもを「取り上げた人」にも出産の医療化の道筋をみることができる。長子出生においてC二〇では「婚家父母[36]」が四八・一％と家族・親族の中心を占めていたが

C四〇では二〇・〇%であり、C四〇の末子出生時には「婚家父母」による出産介助はほとんどみられなくなる（四・〇%）。（女性からみて）「実家父母」が取り上げたケースは、長子、末子ともに後続コーホートにおいてやや多くなる傾向がみられる。医療専門家は長子出生においては産婆（一七・五%）と医者（一八・六%）が拮抗しているが、末子出生においては医者（三五・一%）が優勢である。医者は長子、末子いずれにおいても後続コーホートにおいてより多く、産婆はC四〇において少ない。

表10　子どもを出産した場所（長子・末子）

(%)

	長子				末子			
	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
夫方家	18.5	15.6	8.0	14.4	0.0	2.2	4.0	2.1
妻方家	3.7	11.1	12.0	9.3	0.0	0.0	0.0	0.0
自分の家	66.7	46.7	36.0	49.5	59.3	55.6	44.0	53.6
助産所	0.0	8.9	0.0	4.1	0.0	2.2	0.0	1.0
病院	3.7	15.6	44.0	19.6	25.9	33.3	48.0	35.1
その他	7.4	0.0	0.0	2.1	3.7	0.0	0.0	1.0
不明・無回答	0.0	2.2	0.0	1.0	11.1	6.7	4.0	7.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表11　子どもを取りあげた人（長子・末子）

(%)

	長子				末子			
	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
婚家父母	48.1	28.9	20.0	32.0	25.9	13.3	4.0	14.4
実家父母	0.0	11.1	28.0	12.4	0.0	2.2	20.0	6.2
夫	7.4	2.2	0.0	3.1	14.8	8.9	4.0	9.3
産婆	25.9	20.0	4.0	17.5	7.4	17.8	8.0	12.4
医者	3.7	15.6	40.0	18.6	25.9	33.3	48.0	35.1
その他	14.8	20.0	8.0	15.5	14.8	17.8	8.0	14.4
知らない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	1.0
不明・無回答	0.0	2.2	0.0	1.0	11.1	6.7	4.0	7.2
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

ジェンダー視点からみて注目されるのは、夫による出産介助が一定数存在することである。アジア五地域データの中でこの傾向はソウル、テグ二地域にのみ、みられる。（山根他、二〇一四：一六三）テグデータにおいては末子出生において父親が取り上げたケースが九人（九・三％）いる。世代別にみるとC二〇のうち四ケース（一四・八％）、C三〇では四ケース（八・九％）、C四〇で一ケース（四・〇％）が、末子を父親が取り上げている。自分が生まれた時、父親に取りあげられた人は三人、長子出生において父親が取りあげた人は三人であることをみると、父親による出産介助はC二〇、C三〇の末子出生時にやや多く出現し、その後消えていった行動と考えられる[6]。この九ケースについて長子・末子を取りあげた人の組み合わせをみると、「長子・末子ともに夫」二ケース（一ケースは夫が医者）、「長子は婚家父母・末子は夫」五ケース、「長子実家父母、末子夫」一ケース、「長子父方親族・末子夫」一ケースである。

子どもを取りあげた父親は、どのような人たちだろうか。末子出生時に父親が取りあげたケースの属性には階層的な特徴がみられる。末子を父親が取りあげたとする回答者は女性七人、男性二人であるが、夫（子どもの父親）の教育歴をみると、総じて高い。（「教育を受けていない」二人、高校二人、大学三人、大学院二人）夫（父親）の職業は専門職の人が多い。（専門職六人、農業一人、販売職一人、労務・技術職一人、専門職の人の内訳は教授二人、教師三人、医者一人）親族（特に夫方）による出産介助の延長で出生順位が後のほうの子どもの出産介助を夫（父）が行うことは、対象者の人々が生まれた時からみられる形[7]だが、自分の子どもの出生時に父親が取りあげたケースは高学歴、専門職層が多く、出産の医療化の時代に並行して、新しい意識に支えられた「父親による出産介助」が生じていたことが推測される。

この時期の父親による出産介助はどのような意識に支えられていたのかを、質問紙調査であるテグ調査データから考えることは難しい。キョンサン調査において、自らの出産介助について語ってくれたケースを紹介する。

【事例一　父親による出産介助】（キョンサン調査）

一九三六年生まれの男性。三人きょうだいの長男。慶尚北道ポハンで生まれ育った。高校卒業後、軍隊に三年行き、その後公務員として就職し五六歳退職時まで公務員をしていた。結婚は二八歳の時、四歳年下の女性と結婚した。子どもは一男一女である。ポハンで出産した。子どもは自分が取りあげた。昔のやり方は衛生観念が無かった。本で勉強して臍帯を切る場所を学んで長子の出産に挑んだ。妻の希望で第二子からも自分が介助をした。産後調理（産後、産婦の身体が回

復するための世話）は自分の母がした。公務員で経済的限界があり、子どもに教育を受けさせるために産児制限をした。

この事例から、この時期の父親出産介助が、親族（多くは姑）介助による伝統的な出産を、「衛生」といった近代的観念で否定し、科学的知識にもとづいた出産を志向する意識に裏づけられていたことが読み取れる。さらにこの事例から、「少なく産んで教育を」という近代的観念に支えられて男性が産児制限を意識していたことがみてとれる。男性（父親）の生殖領域への関心と関与が、近代科学的生殖観と近代的子ども観に支えられていたことが考えられる。

五―二　子育て

「子どもが幼い時、世話をした人」のデータを表12に示す。母親に集中（「一番」七七・三％、「その他」一〇・三％）する点は、対象者が育った時の世話ネットワークと同様の構造である。母親以外の人では「父親」「父方祖母」が世話の担い手になる点も、育った時と同様であるが、自分が育った時と比べ、さらに母親に集中する傾向が強まっている。世話ネットワークについて、世代的傾向はみられなかった。「子どもが幼い時、誰かに預けて子どもと離れて暮らした」ことが「ある」とした人は一〇人、養子に「やった」ことがある人は一人、養子を「もらった」ことがある人は三人である。これらの経験については、自分が子どもであった時の経験と同様、世代による傾向を読み取ることは難しい。

表12　子どもが幼い時、世話をした人

（n=97）（%）

	一番世話してくれた人	その他に世話してくれた人（複数回答）
父親	1.0	42.3
母親	77.3	10.3
父方の祖父	0.0	3.1
父方の祖母	7.2	10.3
母方の祖父	0.0	0.0
母方の祖母	3.1	6.2
父方きょうだい	1.0	6.2
母方きょうだい	3.1	4.1
子どものきょうだい	1.0	6.2
その他の親族	0.0	1.0
家政婦	3.1	5.2
近所の人	1.0	1.0
その他	1.0	5.2
不明・無回答	1.0	25.8
計	100.0	100.0

六　相続と継承

六―一　財産相続

最後に財産相続と祭祀・墓地管理の継承についてみよう。親からの相続と子どもへの相続をあわせたデータを表13に示した。親からの相続は全体としてみると「長男単独」（三〇・九％）と「財産なし」（三二・〇％）のケースが多い。親からの相続を世代別にみると、C二〇では長男が単独相続したケースは四〇・七％で財産があったケースの中心を占めるが、C三〇では長男相続のケースは三一・一％、C四〇では二〇・〇％となり、C三〇では「長男優待」（一七・八％）と「男兄弟均等」（一三・三％）が、C四〇では「兄弟姉妹均等」（一六・〇％）「男兄弟均等」（一二・〇％）が相対的に多くなる。本人から子どもへの相続については、全体では「兄弟姉妹均等」（三二・〇％）が最も多く、「長男単独」（一八・六％）、「財産なし」（一六・五％）、「長男優待」（一四・四％）が続く。世代別にみると「兄弟姉妹均等」はC三〇（四〇・〇％）とC四〇（三六・〇％）で、「長男優待」はC四〇（三二・〇％）で相対的に多い。長男単独の財産相続パターンが、親からの相続のコーホート経験という点でも、親世代―子世代の経験の比較という点でも、弱化していく傾向をみてとることができるが、一方で、長男単独相続の「伝統」を実現する基盤としての「財産」がなかったとする人が、親からの相続ではいずれの世代でも、子への相続ではC二〇で二割以上存在していた点も重要である。

表13　財産相続

（%）

	親から本人世代				本人から子ども世代			
	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
長男単独	40.7	31.1	20.0	30.9	22.2	17.8	16.0	18.6
長男優待	3.7	17.8	8.0	11.3	11.1	6.7	32.0	14.4
兄弟姉妹均等	0.0	2.2	16.0	5.2	14.8	40.0	36.0	32.0
男兄弟均等	11.1	13.3	12.0	12.4	0.0	6.7	4.0	4.1
財産なし	37.0	33.3	24.0	32.0	29.6	15.6	4.0	16.5
その他	7.4	2.2	16.0	7.2	22.2	11.1	8.0	13.4
末息子	0.0	0.0	4.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0	1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

六―二　祭祀・墓地管理継承

表14は、祭祀、墓地管理の継承について、親からの継承、子どもへの継承をあわせたデータである。財産相続にみられた「伝統」の弱化傾向は、祭祀等の側面については明瞭に読み取ることはできず、むしろ、長男継承が、親からの継承（六二・九％）よりも子どもへの継承（七三・二％）において、上回る点に注目される。逆に「長男以外の息子」が継承したケースは親からの継承（一〇・三％）が、子どもへの継承（二一・一％）を上回る。

表 14　祭祀、墓地管理の継承

（%）

	親から本人世代				本人から子ども世代			
	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)	C20 (n=27)	C30 (n=45)	C40 (n=25)	計 (n=97)
長男	59.3	73.3	48.0	62.9	74.1	77.8	64.0	73.2
長男以外息子	11.1	6.7	16.0	10.3	0.0	0.0	8.0	2.1
長女	0.0	0.0	8.0	2.1	3.7	6.7	0.0	4.1
長女以外娘	3.7	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0
兄弟姉妹共同（協力）	0.0	6.7	4.0	4.1	3.7	8.9	8.0	7.2
兄弟姉妹以外	3.7	2.2	0.0	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0
祭祀墓地管理しない	3.7	4.4	4.0	4.1	7.4	2.2	16.0	7.2
その他	18.5	6.7	20.0	13.4	11.1	2.2	4.0	5.2
不明・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0	1.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

親から祭祀・墓地管理を長男以外の息子が継承した九ケースを検討したところ、属性的な特徴は特にみられない。親からの財産相続は「財産無し」五人、「長男単独」二人、「男兄弟均等」二人である。子どもへの祭祀・墓地管理継承は、「長男」七人、「その他」一人、「祭祀、墓地管理していない」（宗教的理由）一人である。親からの祭祀を次男以下の男子が継いだ九ケースのうち、自分の子どもへの継承については、大半は長男に譲っているのである。

長男以外の息子の祭祀継承は、どのような状況下で起こったのだろうか。キョンサン調査のケースから考えよう。

【事例二　自分が四男で祭祀主催】（キョンサン調査）

一九二八年に日本で生まれた男性。男六人兄弟の四番目。東京で高校まで進学し「解放」後に帰国した。仕事は農業をしてきた。二三歳で結婚（妻は一八歳）してからも両親と住んでいた。長兄は韓国に帰国したが、また日本に戻った。兄弟のうち二人が日本に「帰化」した。長兄は日本に新しい妻ができ、帰ってこない。兄嫁と子どもは朝鮮に残った。両親とは結婚後も同居してきた。祭祀は自分がやってきた。自分の子どもは娘ばかり（六人）なので、二〇年前に祭祀は甥（長兄の息子）に譲った。娘との同居経験はない。

【事例三　夫が三男で祭祀主催】（キョンサン調査）

一九二七年生まれの女性。キョンサンで生まれ育った。きょうだいは二男一女で本人は末っ子。夫は男三人兄弟の三男。一九四五年三月に結婚し、九月に婚家に行った。夫と農業をしてきた。長男の家は豊かになってプサンに移動した。長男と同居していた姑は夫に「あなたの家に行きたい」と言ったが、暗に断られあきらめた。キョンサンに墓をつくることになり、父母は「キョンサンに墓があるので、こちらで祭祀をやる」と言った。子どもは娘四人、息子一人。娘は結婚して家を出、息子はソウルにいる。いま、舅、姑の祭祀は息子がよくやっている。クンジプ（直系筋の家のこと。この事例では兄の息子の家）は余裕がなく、祭祀にもクンジプからあまり来ない。

事例二は、植民地時代の家族離散と解放後の混乱が祭祀主催に影響を及ぼしている例である。テグデータの「長男以外男子の祭祀継承」の九ケースは全て慶尚北道出身で、植民地時代の家族離散経験の影響を質問項目への回答からは読み取ることができないが、事例二のように植民地時代の移動や徴用、朝鮮戦争を経た家族離散による父系原理貫徹の難しさは、一九二〇～三〇年代出生コーホートの人々の世代的経験として理解できると考えられる。事例三は、国内の地理的移動が長男祭祀原則を不安定にした例である。この世代の人々の子どもとの居住関係として遠方居住は珍しくないが、長男祭祀は子どもに譲った時のほうが安定している。交通の発達による空間的距離の持つ意味の変化と、子ども数に少産化の影響があらわれているために、自分が生まれた時よりも、きょうだい内の男子数が減っていることが、長男祭祀原則の安定化の背景として考えられる。

七．おわりに

最後に、ライフ・イベントごとのコーホート分析を、人生経験と歴史過程のかかわりの観点で要約、考察する。本稿の検討から見えてきたのは、歴史過程はテグ調査対象者の人々の人生経験の、コーホート間の差異をもたらしていることである。地域のデータに促して、植民地期に生を受けた人々のライフコースと歴史過程のかかわりについて一定程度明らかにした点に、本稿の意義があると考えられる。

人生初期の出来事として、学校経験には特に女性において、世代による経験の相違がみられた。C四〇の女性たちには学校経験をもつことが定着しているが、植民地期に学齢期に達したC二〇、C三〇には「教育を受けていない」女性がいる。特に二〇年代後半～三〇年代半ばに学齢期に達したC二〇の女性は、「教育を受けていない」と初等教

育まで経験者で大半を占めていた。この世代の女性には、学校を通した社会的経験をしない児童期、青年期を過ごした人が多いのである。

離家理由にも、性と世代による経験の相違がみられた。C二〇の女性の離家理由はほぼ全員、結婚であるが、C三〇、C四〇には進学、就職による離家が出現する。解放以降に青年期を迎えたC三〇以降の女性において、家から離れて学校生活、社会生活を送る経験が現れているのである。男性の離家理由の世代的特徴として、入隊という理由はC三〇以降にみられることに注目された。入隊による離家は、朝鮮戦争勃発年である一九五〇年以降に青年期を送った世代のライフコース・パターンとして現れているのである。

結婚については、男女ともに世代を追うにつれ初婚年齢の上昇がみられた。特にC二〇女性の平均初婚年齢は一八・五と若い。この世代の女性たちは学校経験が無いか、あるいは短く、家の外での社会的経験を持たず、早い結婚をした人が多い。結婚の過程は世代を問わず仲媒婚が主流であるが、C二〇では結婚前に相手に会ったことがない人が多く、結婚前に相手の「顔をみる」結婚はC三〇以降、広がっている。植民地期から解放後の混乱期に結婚年齢を迎えた世代の人において、結婚前に相手の「顔をみない」結婚が主流であったということである。一年以上の別居経験をもつ人は全体で四五・四%と多いが、先行世代ほどその割合が高く、自由記述をみるとC二〇、C三〇では「日本」「軍隊」に言及する人が多かった。植民地期から朝鮮戦争の時期に新婚期が重なる世代において、歴史過程が結婚生活の不安定さをもたらしていることが考えられた。

産育に関してコーホート差が明瞭にあらわれたのは、一九六〇~七〇年代の少産化、出産医療化の時代の出産についてである。世代を追って家での親族による出産介助から病院での医者による出産へ、親族の中では父方の親から母方の親への移行がみられた。C二〇、C三〇の末子出生時をピークにして高学歴、専門職男性による「近代的科学認識に支えられた出産介助」が、出産医療化に並行して、一時的現象として生じたと考察した。

財産相続は、親からの相続経験のコーホート分析と、親からの相続と子への相続の比較において、長男単独相続の弱化がみられた。祭祀・墓地管理の継承についてはコーホートによる傾向は明瞭には読めない。長男継承は親からの継承より子への継承のほうが上回ること、次男以下男子の継承は親からの継承時のほうが子への継承時より多いことに注目し、植民地期から朝鮮戦争に至る時期の家族離散など、生活と生命の危機的状況のなかで長男継承原則を保つことが困難であったこと、子世代への継承時には交通の発達によって遠方居住の持つ意味が変わったことが、時代背景と

して考えられた。

アジア五地域の比較視点でみたとき、出産の医療化の道筋は、とりわけ興味深い論点であった。筆者らは前稿において、五地域における出産の医療化の道筋には、①地域の伝統的助産者→医療産婆→医者（名古屋）、②地域の伝統的助産者→医療専門家（大連、イロコス）、③親族（父方優勢）→医療専門家（医者中心　ソウル、テグ）の三パターンが見られたことを指摘した。（山根他、二〇一四）さらに、テグ地域のコーホート別検討を通して、一九六〇～七〇年代、少産化と出産の医療化が進んだ時期の一時的な現象として、高学歴、専門職層の父親の出産への関与は、出産の医療化とジェンダーに関する、独特の歴史的経験であったと考えられた。この父親の関与には、親族による出産介助という従来型の延長という面と、近代科学的生殖観、近代的子ども観に支えられた新たな行動様式という面の、二重性があると考えられる。

アジアのライフコース比較は、日本や欧米の家族・ジェンダー史に再考をせまる、豊かな水脈をもっている。今後、分析・考察視点の精錬をはかりながら、アジア諸社会の研究、データとの対話を重ねていきたい。

註

（1）二〇〇七―二〇〇九年度の科学研究費助成を受けて実施した。（研究課題名：「二〇世紀アジアの社会変動と高齢者のライフコース：家族イベントの聞き取りを通して―」（基盤B）研究代表者：山根真理（愛知教育大学））調査地は、名古屋市（日本）、ソウル特別市（大韓民国）、テグ広域市（大韓民国）、大連市（中国）、イロコス・ノルテ州の州都ラワッグ市および周辺町（フィリピン）の五地域である。五地域調査の概要は山根他（2014）を参照されたい。

（2）十分なサンプルサイズとは言えないが、一研究者が主催する研究プロジェクトによってアジア五地域でほぼ同時に行った調査であり、対象者の年齢や教育歴からして自記式調査は難しいため、五地域それぞれ一〇〇ケースの回答者数を設定した。得られたケース数は、名古屋八二、ソウル一〇〇、テグ九七、大連二二三、イロコス八一である。

（3）日韓文化交流基金の助成を受けた「訪韓フェロー」としての研究期間（二〇〇四年四～一一月）に実施した調査である。調査は山根・洪の共同研究として実施した。調査の詳細は山根（二〇〇六a）を参照されたい。

（4）韓国統計庁「KOSIS」掲載のデータによる。（URL: http://kosis.kr/index/index.do　二〇一八年六月閲覧）

（5）五地域調査の名古屋、大連、イロコス調査では「生まれた子どもの父の母」を意味する言葉を用いているがソウル、テグ調査では「婚家の父母」を意味する言葉が用いられている。対象者出生時の介助者として「（夫方）祖母」が優勢であったことか

ら考えると、「姑」による出産介助として解釈できると考えられる。「実家の父母」についても、「子どもの母の母」と解釈する。

（6）ソウルデータについても詳細な検討が必要である。

（7）自分の出生時に父親が取りあげた三ケースの出生順位は第三子二人、第五子一人である。

参考文献

安藤由美、一九九八『激動の沖縄を生きた人々―ライフコースのコーホート分析』早稲田大学人間総合研究センター。

安藤由美、二〇〇〇『沖縄におけるライフコースの出生コーホート比較研究』平成九、一〇年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書。

エルダー、G. H.、一九八六、本田時雄ほか訳『大恐慌の子どもたち―社会変動と人間発達』明石書店（原著一九七四）。

エルダー、G. H.・ジール、J. Z. 編著、二〇〇三、正岡寛司・藤見純子訳『ライフコース研究の方法：質的ならびに量的アプローチ』明石書店（原著一九九八）。

ハレーブン、T. K.、二〇〇一、正岡寛司監訳『家族時間と産業時間』早稲田大学出版.

正岡寛司・藤見純子・島崎尚子、一九九九「戦後日本におけるライフコースの持続と変化」目黒依子・渡辺秀樹編『講座社会学2 家族』東京大学出版会：一九一―二一七。

森岡清美・青井和夫編、一九九一『現代日本人のライフコース』日本学術振興会。

박 경숙（パク・キョンスク）、二〇〇四「생애구술을 통해 본 노년의 자아」『한국사회학』제三八집四호：一〇二―一三二.（「人生の語りを通してみた老年の自我」『韓国社会学』第三八集四号。）

朴京淑・山根真理、二〇〇七「韓国女性のライフコースと仕事・家庭役割の意味」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房：五一―六九。

송인주（ソン・インジュ）、二〇一〇『남성 노인의 노동 생애경로와 일의 의미』가토릭대학교 대학원 박사학위논문.（ソン・インジュ『男性老人の労働人生経路と仕事の意味』カトリック大学校大学院博士学位論文。）

박 수미（パク・スミ）、二〇〇二『한국여성의 생애과정과 경제활동―노동사장 진입 퇴장에 관한 종단적 연구』한국전신문화연구원 박사학위논문.（『韓国女性のライフコースと経済活動―労働市場進入・退場に関する縦断的研究』韓国精神文化研究院韓国学大学院博士学位論文。）

山根真理、二〇〇六a「韓国における高齢者のライフコースと社会変動―家族イベントとのかかわりを中心にして―」『訪韓学術論文集』第六巻、日韓文化交流基金：七七―一〇四。

山根真理、二〇〇六b「韓国の家族・ジェンダーの『伝統』と『変容』再考」北川隆吉・監修、北原淳・竹内隆夫・佐々木衛・高田洋子編著『地域研究の課題と方法―アジア・アフリカ社会研究入門―実証編』文化書房博文社：一二一―一三七。

山根真理・洪上旭・朴京淑・李東輝・長坂格・中筋由紀子、二〇一四「二〇世紀アジアの社会変動と産育のネットワーク―五地域ライフコース調査から―」『愛知教育大学研究報告』第六三輯：一五五―一六六。